

当J Aが外国人技能実習生共同受入事業を実施してから1年の歳月が経過し、1月から新たに6名の実習生を受け入れた。

技能実習制度は「技術や知識」の発展途上国等への移転を図るだけではなく、日本の文化や地域社会における行事などを伝えることも重視し、「人づくり」に協力することを目的のひとつとしている。

今回は、当J Aの受入事業における現状と第二期生6名の紹介を踏まえ、450年の伝統がある「沢田ろうそくまつり」に触れた実習生の様子を伝えようと思う。

人づくり

現在、当J Aでは20代前半の若いベトナム人実習生12名がリンゴ生産において業務処理能力や力量の向上を図っている。第一期生については、量販店で販売される袋詰め作業をこなし、今ではフルー

ツステーションの第一線である選果作業に携わった部分で知識に磨きを掛けていく。また、農繁期にはリンゴ生産者の園地を訪れ、有袋品種における袋掛けなどの生産過程を学習し、生産から販売に至るまで様々な面でレベルアップを目指している。

技能実習生は若い人材が中心となっていることから、フルーツステーションの現場では若さ溢れるパワーと仕事に対する熱心さが日本人作業員への刺激となり、明るい現場づくりと生産性向上に繋がっている。また、当J Aの明朗活発な実習生らは、日本人作業員とのコミュニケーションも驚くほど上手にとっていることから、時間が経つとともに日本語の上達が目に見えてわかる。こうした技能実習を取り巻く環境は、習得した技術向上だけではなく、日本での生活経験や日本語能力の習得に役立っていると感じる。対照的に、困っていることアンケート調査で挙げられたひとつに「メンタル面」に関する例があるものの、当

風習に触れる



J A職員が実習生に対するメンタル面を考慮した環境づくりにも努めるとともに、実習生自身が明るく振る舞っていることから現場の雰囲気は最高の形となっていた。

一方、国際交流については、国際社会との調和を図るとともに日本の文化を学ぶだけでなく、地域社会に根ざした交流も大切に



ベトナム人実習生 新たに6名受入

ている。昨年は、国の重要無形民俗文化財に指定されている「弘前ねぶたまつり」に相馬地区の住民と一体となって参加し、勇壮に舞う武者絵と音風景を目に焼きつけた。

郷土芸能を伝承

夏が終わると気温は下がりはじめ、ベトナムでは目にするのではない雪が舞い降りる。初めて目にする雪に感動する実習生らの高ぶる気持ちがとても印象的だった。

新年を迎え、積雪量が増す沢田地区では450年の歴史をもつ「沢田ろくそくまつり」がある。ロウの垂れ具合でその年の豊凶を占い、相馬地域一丸となって伝統を後世へと受け継いでいるまつりだ。無数にそびえるロウソクが灯す火は、山の斜面を幻想的に映し出している。実習生の目に飛び込んできた初めての光景は、灯火と雪が融合する暖かい相馬地区の住民が創り

だした風習だった。

また、毎年豊凶占いを行っている氏子総代の大沢勝雄氏によると、今年度の豊凶は次の通りだ。

- ① 作物は平年並み
- ② 風の気はない
- ③ 雨が近い
- ④ 地震に注意





グエンティクック



グエンティミンフオン



ギエムティゴック

ベトナム人実習生 第二期生



レーティマイ



ゴーティガー



グエンティハイエン

自然な地域交流

当JAフルーツステーションで働く荷造り作業員は、相馬地区のリンゴ農家も多く、自ら高品質栽培に取り組んだリンゴを生産者の立場として厳しい選果基準を設けながら品質向上を目指している。実習生は、フルーツステーションで作業に当たりながら自然と地域住民と一体となって交流を深めることが出来ているようにも感じる。

2月14日、沢田ろっそくまつりの風習を目の前にするとともに、伝統を後世に伝える地域の人々と笑顔いっばいに交流する実習生らの光景がそこにはあった。相馬地区の人々が、暖かく外国人技能実習生を受け入れる環境ができていく現状は、とても魅力的な受け入れの場だと感じた。実習生の中には「日本語」が得意な人や、まだ日本語に慣れていない実習生も様々いるものの、日本語が特に上

手なレーさんやヒエンさん（一期生）が通訳をし、地域住民や職員らと上手くコミュニケーションを図っている。

第二の母

当JAは、ベトナムから相馬地区へと移住する実習生に、生活環境にも万全な体制を整えている。住む施設の整備だけでなく、JAの敷地内にあるハウスを使って自給自足の楽しい野菜作りなども伝えている。また、心のケアや頼れる存在として、実習生を陰ながら支えるひとりの女性がいること



石田 勝子さん



鳥居の先には、ろうそくが無数にそびえ立つ



豊作を願って手を合わせるリンゴ生産者ら



斜面に描かれた曲線が訪れる人の心を捉えた



天高く炎が舞い上がり、長い歴史に人々が想いを寄せた



相馬地区の心温かい、まつり実行委員ら

はご存じだろうか。実習生からは「お母さん」と呼ばれ、第二の母として実習生を見守る石田勝子さんの存在である。石田さんは、紙漉地区で理容店を営む優しい笑顔の持ち主で、第一期生を当JAが受け入れた頃から実習生の面倒を見つけてきた。今では、何事も優しく教えてきた石田さんの包容力が絶大な信頼関係を築き上げている。

実習生にとって、日本という異国の地で生活することは「メンタ

ル面」への考慮がとても重要視されることから、JAだけではなく地域住民が一体となって支えていけるように取り組んでいる。相馬地区の温かい人と人の繋がりは、実習生の胸に響き渡っていることは間違いなく、風習が伝えたものは伝統だけでなく相馬の強い「絆」であった。

相互扶助を胸に

技能や知識を日々学ぶ実習生の一生懸命な姿は、受け入れている私たちにとって見習う面がとても多いと感じる。また、荷造り作業員などの人手不足の現状が実習生の頑張りによって改善の兆しへと向かっていることも周知していただきたい。4年連続のリンゴ高値精算に向けて、実習生と一丸となって取組み、JAが地域社会の一躍を担って実習生をサポートしていく次第だ。